

親の目

子どもの目



八木 絹

わが家の断乳騒動

息子の貴文がこの三月で三歳になったのをきっかけに、わが家では「断乳」を決定した。断乳というより「離乳」あるいは「乳離れ」といった方がなじみがあるだろう。しかし「断乳」は最近の「育児界」では常識的な言葉だ。

貴文は二歳八ヵ月まで母乳を飲んで

いた。今年八月にはお兄ちゃんになることがわかり、母乳をやめた。乳首への刺激が流産を促すからだ。本人は「おっぱい飲むと赤ちゃん死んじゃうんだよね」といって納得。それからは哺乳ビンで寝る前に三百CC以上の牛乳を飲むようになった。おかげで夜中に二回はおむつを替え、バジャマから布団からグチャグチャに濡らすほどおしっこをすることもしばしば。これではかなわないと、三歳になったのを機に断乳したというわけだ。

誕生日から牛乳なしで寝せようとしたが、予想外の抵抗にあった。「どうしてあったかいモーマーさん(牛乳のこと)飲めないの?」と素朴に聞いてくる。母乳をやめたときほどの説得的な理由が見つからないので、「三歳になってモーマーさん飲んでる子はいないよ」などといってみるが、だめだ。

十日以上にわたって、夜中の十二時半くらいまで押問答したり、寒いなか六ヵ月のお腹でおんぶして散歩に出か

けたりの日が続いた。そのころには私の頭は断乳のことではいいで、夜がくるのが恐かった。

ある晩、貴文はもはや禁断症状のようになり、泣き叫び続けた。たまたま上京していた私の母は夫と「もう飲ませればいいじゃないの」などという出す。「断乳は親の決意次第」という言葉が頭を駆けめぐり、「絶対にやめるんだ」という気持ちだけが巨大な岩石のように動こうとしなかった。結果、私は「勝手に飲ませればいい。私は知らない」といい放って、雨のなか深夜一時すぎに家を飛び出した。

貴文は、そのあとすぐに泣きやんで、「ぼく、モーマーさんよりママの方がいい」といったそう。以来寝る前の牛乳をいっさいやめた。翌朝、母は怒って新潟へ帰ってしまった。

今日の子育て環境のなかで

「なんてばかなことをしたのだろう」としばらくの間悶々と過ごした。急に

牛乳をやめたことは親の都合だけだったのではなかったか、なぜ子どもの成長を待ってやることができなかったのか——と。

しかし、最近考えるのは、私たちの子育て環境のことだ。子どもを育ててみて第一の教訓は、「育児書は読まないほうがよい」ということだった。今日の子育てのさまざまな問題の原因を、「核家族化」に求める意見は多いが、大きな問題は育児の「情報化」にある



のではない。私も初めのころは、それこそ「泥縄式」に育児書を読んだ。が、それぞれの育児書に書いてあることは違う。医者や保母さんによってもいうことがバラバラ。どれを信じていいのかわからなくなり、育児ノイローゼ気味になる人はけっこういる。「断乳」については、多くが「一歳をめどに哺乳ビンをやめよ」だ。市の一歳半健診では、断乳していない人は別室に呼ばれて個別指導される。虫歯

菌並びその他の弊害を

こんこんと諭される。

私はそういうことは知っていたが、子どもが自然にやめればよい、と思い、放っておいた。

しかし、三歳までというのはあんまりだという思いが、私に子どもから哺乳ビンをはぎとらせたのだった。これも考えてみれば、私

たちは「子育ての常識づくり」もといえは「没個性の子どもづくり」という育児情報の意図から自由でないことの証明だ。「育児情報は自分が都合のよいものを選べばよい」と思っていた私もその例外ではなかった。

結局、子育てで頼りになるのは、もちろん夫と、同じくらいの子を育てているお父さん、お母さんだ。私にとっては、職場の子育て中の女性記者たちであり、同じ保育園に子どもを預けている仲間だ。新婦人の「子育て小組」

には、中学生・高校生のお母さんもいる。職場の友人は、断乳のことを聞いて「だけど、あなたの気持ちはわかるよ」といつてくれた。私にとってはその一言だけでよかったのだ。

子どもは仲間や地域のなかで育つが、親も同じ。子どもは三歳、親も三歳ののだ。わが家の断乳騒動を通じてつくづく感じる。

(やぎ きめIIジャーナリスト)